



牛馬問

二



牛馬問二

目録

- 義之字字文 一
- 今道 二
- 楠菊水 三
- 煮の敵 四
- 喉とちんちん 四
- 籙の字 五
- 星牡丹と牡丹 六
- 梅檜の一本 六
- 天狗鬼 八
- 都の人形信 一
- 山椒と此字 二
- 楠の削 三
- 立聲氏が妻 四
- 籙 五
- 阪家隊 五
- 星キ花 六
- 鉄炮 七
- 二初 八

- 面乞 九
- 短尺 十
- 人丸穉世 十三
- 此世の系 十三
- 蟹坂 十三
- 老木丸精 十六
- 奇病 十七
- 人と食ふ心 十八
- 燕の敵
- 志どり 九
- 熊谷法師 十
- 悪好法師 十三
- 八月十五日妻 十三
- 妖怪徳説 十四十五
- 枕の怪 十七
- 人肉と食 十八
- 蛇乃志信

目録年

牛馬問卷之二 前集

新井白蛾祐登著

○ 和人の日子孝文は梁^{リョウ}北周^{シウ}興^{キョウ}嗣^シが撰^{セン}なりふ晋^{シン}の王
 義^ギ之^シが著^{シヨウ}なり子^シ字^ジ文^{ブン}といふ事^{コト}ありて是^{コト}は此^{コト}也
 一 系^{ケイ}にんへりし和^ワ漢^{カン}の源^{ゲン}集^{シュウ}の況^{セイ}と同日^{ツク}の夜^ヤ記^キ
 著^{シヨウ}て曰^{イハ}後^{コト}方^{ハツ}へりて世^セ文^{ブン}りと王^{ワウ}右^ウ軍^{クン}の著^{シヨウ}ありて顔^{ガン}
 と石^{シヨク}成^{セイ}梁^{リョウ}の著^{シヨウ}て興^{キョウ}嗣^シと初^{ハツ}して次^ジ顔^{ガン}せりしを撰^{セン}
 成^{セイ}て後^{コト}義^ギと書^{シヨウ}なり文字^{ブンジ}おぼし敷^シて興^{キョウ}嗣^シが文^{ブン}を
 連^{レン}續^{ゾク}せりしもの故^{ユヘ}に義^ギ之^シは前^{ゼン}人^{ジン}なるれり子^シ文^{ブン}と
 世^セ事^ジ續^{ゾク}秘^ヒ笈^{キツ}と存^{ゾン}み見^ミへり
 ○ 或^シ人の曰^{イハ}都^ト北^{ヘイ}人^{ジン}の山^{サン}吹^{フイ}のこゝおまゝなりて云^{イハ}義^ギ

花あれども遠く願はるる中ふ實なり王土乃
もよもほは何れ都府徳なり也 曰く下り
を況むるに又年々人の心なりしごとく
幸むしよかひらきるのたむ老の相治さし
ぬし我のよ又雅岐の人乃浮て根れる
甲乙を悔せん凡富り人乃早暮みして
賢しき人の流ひるく貪欲と流く
皆是なり富り人の不意く慈然乃
賢しき人乃悲みく貪り心なきは
なりと之を君子なり文藝をて利
あるのの皆下愚の野人なり扱は
世の國は

皆成たりん又いつ世の玉乃人
多きあり七百歩と知るの王都
なりん風水の美と見ても知
兵部少輔成宗文明の秋上
時今遠より洛中をきて
都出歌詠のそれと
神のれ
自然と
○今遠より
吟比敷の
道より

牛馬問

の御社をたもめて山を越え松が勝なりと
まゝ此れを二系ゆ来の東境をいり通りぬる内
なり。

○お人の日記に於て山吹の事なほいかに山
極集款をいふと山吹と湯の部すき事久しと世餘礮を
やまぶとこれ山吹といふ世又まなりや 言て曰款を
りといふ山吹きふわくは餘礮も又やまぶ記にお
と此物に系細目より不裁事物細目といふ事ふ出
先軍多くい相なやまぶとと湯の是は和名トキ
イバラといふものし 故人又日記にいふ山吹きけ文
字はゆや 曰棟棠記なり是又日記にいふ

異おわの湿まうう

○棟筋見云官職を辨し山城玉井を此黒お紋仕
たあひ世玉川のやまぶ記なほいかに世系
と事夜ふ備しをい附着るといふなりを
流をとりて家の紋と定ぬ山吹玉山ぬまをい
けり子孫の人山吹をい世系とすといひたりや
なく菊水とるをい河陽侯正成の先祖と
又氏を楠と号す此事は何用と棟成細の附門あふ
といふ世系植はるをい世をいけり世細の白楠
は世系ゆ孫を剛堅めて河陽不備をい世系
不物是世系ゆ孫の剛堅めて河陽不備をい世系
不物是世系ゆ孫の剛堅めて河陽不備をい世系

嘔うけり月も又南河内をさるる事ありけり
伐り榑城氏と名り昭徳と稱すの久しき終ふ
正成れと紀一君子とせし人臣乃根基也今福忠
善世智人と稱て不^レ能^レ辨^レ人なりけり

○楠の字クスノキと訓す事^ハ隈^ハ也クスノキは
榑の字^シ此れも氏のと記^ハり^カなり^カなり^カなり^カ
そとくハ長谷川長谷寺なり^ハ和^ハ訓^ハ長谷寺
またその訓^ハなり^ハ是は古^ハ和^ハの^ハ訓^ハ也^ハ長谷寺
あり^ハこれ字^ハ青^ハ城^ハい^ハり^ハ也^ハ初^ハ也^ハと^ハ通^ハ也^ハ
公^ハ佐^ハの^ハ云^ハ也^ハ世^ハに^ハ傳^ハり^ハ終^ハも^ハ長^ハ谷^ハの^ハ字^ハ也^ハ也^ハ
訓^ハと^ハ附^ハ也^ハ

○奥州の恭衡^ハ敗^ハ亡^ハの^ハ後^ハ在^ハ后^ハ大^ハ河^ハ次^ハ節^ハ悪^ハ任^ハと^ハ云^ハ
之^ハの^ハ派^ハ黨^ハと^ハ集^ハて^ハ鎮^ハ念^ハ城^ハ討^ハ人^ハ事^ハと^ハ討^ハり^ハ討^ハり^ハ由^ハ利^ハ中^ハ
ハ^ハ維^ハ平^ハが^ハ許^ハへ^ハ使^ハ者^ハと^ハ送^ハて^ハ云^ハ古^ハ今^ハの^ハ間^ハ亡^ハ親^ハも^ハ在^ハ史^ハ
婦^ハ乃^ハ怨^ハ敵^ハと^ハ報^ハす^ハり^ハハ^ハ召^ハ考^ハの^ハ事^ハなり^ハい^ハま^ハす^ハる^ハ人^ハの^ハ
敵^ハと^ハ討^ハれ^ハ例^ハあり^ハカ^ハ子^ハタ^ハフ^ハヒ^ハト^ハカ^ハ任^ハ福^ハり^ハ其^ハ例^ハと^ハ始^ハり^ハが^ハ福^ハ也^ハ
愈^ハに^ハ越^ハく^ハ而^ハし^ハと^ハ又^ハく^ハり^ハ我^ハの^ハい^ハり^ハも^ハも^ハ示^ハ於^ハ
て^ハ何^ハれ^ハか^ハの^ハと^ハも^ハ晚^ハと^ハ

○若^ハ名^ハ盛^ハ隆^ハの^ハ時^ハと^ハ此^ハ世^ハ孫^ハ之^ハ湯^ハと^ハい^ハま^ハす^ハの^ハ時^ハ今^ハ
あり^ハ妻^ハ成^ハ人^ハ也^ハよ^ハ出^ハせ^ハり^ハ又^ハ教^ハ達^ハと^ハ企^ハけ^ハる^ハ
盛^ハ隆^ハ大^ハと^ハ怨^ハり^ハ彼^ハ之^ハ野^ハり^ハ妻^ハと^ハ律^ハ判^ハり^ハせ^ハり^ハ
け^ハり^ハ世^ハ女^ハ死^ハし^ハ修^ハて^ハ一^ハ首^ハと^ハ成^ハり^ハ也^ハ

井馬河二

浅穂や身と行を好ま捨つまへ

神とて髪うら乃はくさよ

○草の玄葉に隈をかりんとの文字より河書
魚 曰秋候し書へしひく大妻より四方此
とくまはらひ懸出りま此都までは懸なむ人
なり由舎山住人なるてよま下とみえ上りけ
秋都のうらめく世懸を渡さる事試してひえ
ふ美中此家人の登り及よ兼座を擡て衣女とな
りて彼家人懸懸し入りてな懸もたむるをづ
けり別の事わたりかと出たの又文字なりか
るしと云

水鏡か南よりか万のりくまは

月乃いこく入やりよらうをけ

かく極して大内(なり)加し田舎の家人極は
成てひましく下取ゆとよ又兼座より此れのを
みへ隈なすし宛るれ彼家人隈と見えて是はか
貸やといひより始ふ

○女中の玄葉は纏とおしとよ又兼座といふ
事はひくし兼座は是とよひけり又乃た兼座
室者外ら此方是な見えいやさりのなひ
御と美ひけり或都よりあふ

日なりとれををまよふ山住人

と讀みしれんた傍の野の色をたれ下りけしと始り又
 園楽記子浦をくふて片纏の集り所と海の内
 ひろく記し故と土俗といふがらんゆりといひ也
 志るれいしはせりも世の言葉けし奥に纏る

○車人の日纏の文字と和字なりけし奥に纏る
 ありや 日海温とのすのこ

○版固隊と牡丹隊と書きとも多し盛なり
 下りすくこと牡丹花よりえきり方々のこし奥に纏る
 舞舟といふ所のはくやうきねのこし奥に纏る
 此の意にまかりて上へ小豆又は大豆の粉なり

かげりて秋のえんといふ是も秋の花もこれぞ
 なり下纏の名乃依はせの隊といふ是片隊のうら
 みておのころなり加し満りらの就なり世物色五
 のあてみてえいといふか

○車人の日車牡丹を牡丹とといふは何れのを
 いふ也 日車牡丹は刻が半と書せり云
 葉りて花なりはあてり冬牡丹は日車あてり
 大抵その名の様なりと牡丹花形密せりなり
 漢文に於ていふこと牡丹の事なり世に志るれ
 於て云

○薩州候の醫官武治氏云碩曰徳本真志乃

記と不開のひまの記書より人々同くもそ
記と不開は義あり 予の白足下も志く人々も
又志く予の備者るんは是を知ん然れも古の
作あり書著赤白黒の五色を以て水火木金土の
五行の記書なるに其は水は腐一火は炎一土は
地の色一記書を以て開くは陽氣を養ひて
陰用養乃そののしを養く事なり其の記
書は又今津ふらとすも極まるとも養う
て考理ふあり又五色の蓮華の記書と
常此事より候

○房州不異所の木あり初春には梅花を開き

月を以てあつた花を開く梅は八重あつたは至
なりと考長日記ふんじり又同書三年の年
此法なることしりその時乃南蛮より候と
中好ふそをこれ名自書す哉の始なり一漢土
亦も明の形廣乃比より始り崇禎の國也
かりんれん禁せりとのさそは是盛んし一
漢芭蕉又漢婆姑とも書一各返魂草一名撰
不返一名煙草一名想思草一名漢肉
果細切りたりは合線煙又返魂煙といふ物類人
は線南草又南靈草といふ物りの南蠻國より
出漢婆姑は南蠻國の女人の名なりは女漢

鹿乃の久し世草と眼して作と故ふふと結
鬘活別集と存し

○世伝し小鉄炮の事と種子傳といふ事皆ては
久きききりしそ子グ傳ハ鉄炮乃始て鉄炮は
ある名あれて鉄炮の世名あり世よりそ子グ
傳ハ袖鉄炮小鉄炮といふのし種子傳と
いふとさうふ不通の也 東都清鉄炮傳の相傳り
きぬ武儀安略は馬銃と書しり穿林銃馬
と義し鉄炮の始は貝原氏和事始ふ出故に
今都々

○古老の知傳ふは相乃始どおひやうしてこれ

く中世以来作り初し事多ふて皆人の考と
成りの又多し一之試考は天物の名は山海經も
見ゆりあれとも日本のいふ所は天物にあはれ相今
絵ふりし立附といふ所のと看と世は 東都
清大工小大隅といふ人乃祖天下の始り又鬼の絵
と見れんともく鹿の皮は擗鼻禪とせは是は
古法眼元信下の始りをもいふりし和信小世實
乃圖を鬼門と号しんを恐れ避る所を此を
表して牛の尻をかこり纏ふり下鹿に
とり入すといふ異形と云て丹書と相こ
鹿乃皮の擗鼻禪ありて一

○ぬんごう 今日小田ゆかりの中夏の製と
同くは草綱目に見えしは扱婦女の着る
は女鼻褌褌ともと書し扱布は一名かりテ
ユモジとは女中の習言なり又いかりきあ
の布二幅あてするなりフタノといふは事方
起り馬や多葉集の
それ〜は夕夜扱の〜こすま
扱とて是ては扱女に二幅〜一
〜はは扱褌とも鶏衣とて書ては
乃事し又賀州人の褌褌の事とて扱といふ
是を扱の方言なり

○扱人の曰東我去靴山下り川向ふここ國山とて扱
荷の社をひり〜百姓大世社なり〜と雨をせし
おかし甚角キカクモラ治て〜り我も面を〜と扱をん
とて 夕暮や田試又扱りの社あり〜と扱
そり〜小島大面面治て百姓扱を〜ぬを白
今ふ扱社〜と〜山加扱乃感カのなり〜
書て曰世白とわりの〜む〜能國は神作は〜
〜面をの扱 天の川苗代水水と〜と〜
〜り〜神あり〜神 白辨ふ〜と扱
〜り〜と扱の事は〜の扱甚人乃扱といふ
の〜と扱國の扱と入扱〜と扱

その妙は顯アキラと事能因其角もそららりは知今も
改や他人と也

○東人の曰伊勢の麦林は天代の名を承り加州
より鳥チの巻れ中一 長き日は札ツクを巻りて一
杯ハのり 菴乃ぬきまも志よりを交は附ツケ合
志より解ゲ一かゝる響く点と除ツクるなりけ
物何れや 曰志よりは短冊タニザクの板イタなりのおて
書物の間一入らまのし書と後ヨてすナカうナカく
止る附一あり一是工一人のなりをえと志
アといふ紙シ折乃我なり一知りの名乃春
野山をコひれ志よりのと後ヨる志よりはあ

一知知人の同ト一

○志タ元ノの強ワタヒしスビラを及ス短尺タニを附ツきと作
しタまらシひて壽永の比もあリのやうニあり共
多シ一入ガりヒガ事ナらビうノ色ハ紙ハ又ハ詠ナ系ノ之ハ板
小盛セイ表スイ紀キも短尺タニと片ハあり短尺タニは為タ世ヨ脚キヤクと板イタ所ト法
作シとあ人の作ナなりといふを比ヒ東人ト法家ト乃短尺タニを集
屏風ビョウに押オシて密ヒを拓ヒき後ノげりふを東人の中ニあり
敷シ鴻コウ乃通トりかシ一ニ記キをヒきテ

らシばりセんタりシとナリシ
知チるレん後碓ダイ坂ゴ系ノ比ヒちハけリまリ又ハ志シ度トはシ
附ツれハ葉ハ室ム積ツ房フ乃カきシ一ニ

○玉岩の敦盛熊谷の塚に傳ふ池にて甲池と
号は池の多りて予處を予對付傳ふりおかし
池の形より一は所い最り予向ふて曰世處をハ
熊谷は所う終焉の回終といふは所う曰は承は
終の地ありは是は熊谷敦盛を對てり善權乃
る一急教公一即世池と甲と捨てお家と遂これ
一而し予う白地とい熊谷終焉の地又るきくを
善一由と此墓といはちいもやは所の回志とい
予按ずりて熊谷次郎直実敦盛を對て教公一と
池にて甲と統てお家なりとい事とてを言なり
建久二年壬子之月九月廿九日下村守直光と熊谷

直実清光に於て境海の事と直実武勇に於て庄
入苗子といふも對決して再は知千の才ふ不足
頼朝云云と尋問いあり直実ヤ々曰世事根原
平之京村直光を引級と方の間及理とヤ入今般
下向て京清成敗の延直光とてめて眉を閉下を上
は理星の文書と要石徳と稱し自刀を取
て除髪し南門より出てゆきなりて遊世と是
壽永三年敦盛を對し今年己丑九年の早を
臨るは色部之位一承元二年より承久二年十月十日
執終の期より一承元三年より承久二年十月十日
直家九月方上はと清所中村守直光と

少佐と扱十月十四日未の村と以て後馬の坊と
置きのり直実入道お福の間苗目と以て僧
侶彼山の本庵と團庵と直実入道お徳衣住
着し乳盤と昇り徳庵と堂と合せざる勢と念
佛し現終りて悉く取病なり以上東鑑と記と
明徳より一志りる今東山の兼良石の介田
記をけしむるにひかりなり又直実入道は云
と不化蓮生との事成類ひる元久二世年八
月十六日宇都宮赤松三郎頼朝總執事世法名蓮生と云
然るに所叙前年より首り是れは人張り候と云
又此間名なりと云

○人丸は神延元久三月十八日石丸のふと史記
角山と卒せり甚旧里なり神世
石丸のやう角山本所の南より浮世の足成り累代
志の和名今も人丸寺と云ふ所の社なり
乃ち此れ回復せられ人遣書せしなり
○東人の曰恙好法所洛和旅団の藤上二塔婆と建
植置し寺と旅の園好邊と云ふと云せしは生かれ神
世はと云ふ塚なりあはれは是れも兼良お徳衣の
塚と云ふは恙好法所のゆきの地と云れりや 曰何
賀の園と云ふ藤田系保村(昔は田研た)不養と云は
ケユニ塚と云ふ所のさき地と云ふ頂ふ至りて又人丸横二

尺石面より善好は御墓たたり親徳元年二月々旨
下のたたりは左邊傍佑下部善好御居と書しより是ハ
延寶年中始て求ぬより故に知希し(伊賀権
守橋成忠と思及る)紙以て世傳に赴て種生たふ
草庵と流ひ伝り

○法也く草と善好日編りやうと行り大多し
此の法是は善好がらうし命松丸といひしもの信工
今川了俊に伝へり了俊對命松工善好の教を
此家の之をとり回れふ多しは廣の法と傳へる
て傳へるもよくもかこころに重寶のしとやと傳
ふれん書させよとて右田の感神院に命松丸を流

うへに伊賀の草庵へ伝ふを即光貞とて秋に心
有りしと傳へりそのしよは伊賀の草庵より
てやうく平叔りし集宛ぬ今のつとて草は右田
ありおほくは紙にけり紙に經卷なりとてうけせ
その裏にとて書経ありとてりて來りぬれり
後命松丸とてり物又命松丸傳へるも集宛
款一冊善子二冊とてりけり付附款号たきしは發端
の文字紙に傳御草と題せり今川了俊みてり
○善好法解の白八月十五日九月十日は善好小南
此宿清明故に月紙紙(モリカフ)言及とてり今按
婁江二千八百のえ西方七宿の一とて金方とてり(ツカサド)

法明の成理ふたてぬるやうなれども、先年八
を以て日之直^{アツル}中毎の書七改^{タイ}唐^{レキ}ふ^{ヨシ}徳^{ヨシ}に身
く不^フ因^{ケイ}志^イの^イ道^イ好^イ後^イ々^イ不^フ終^イの^イ事^イ信^イと^イ
以^レ佳^イ節^イ振^イる^イ久^イく^イり^イ平^イき^イし^イ佳^イ節^イ系^イ難
収^イ集^イる^イ故^イに^イ撰^イり^イ事^イも^イ多^イく^イ又^イ取^イり^イ不^フ定^イ後^イも^イ撰^イ
を^イ代^イり^イて^イも^イ一^イ巻^イ法^イ附^イ合^イの^イ理^イ家^イと^イ撰^イり^イ
爰^イに^イ解^イを^イ書^イ解^イ一^イ我^イ不^フ若^イと^イ撰^イり^イる^イ影^イり^イ
わ^イく^イれ^イる^イ意^イ好^イむ^イ人^イも^イあ^イる^イ一^イ言^イ一^イ句^イ何^イの^イ事^イ
来^イ唐^イと^イ撰^イり^イ味^イの^イ深^イ長^イなる^イを^イ偶^イ然^イと^イて^イ似
し^イる^イもの^イの^イ

○鈴^{スズ}鹿^カ山^カと^カ去^カ山^カと^カ此^カ同^カ之^カ撰^カり^カ板^カと^カの^カ前^カを^カな^カ

傳^カの^カ石^カ橋^カと^カ撰^カ板^カと^カの^カ馬^カと^カの^カ考^カを^カ荷^カの^カ佳^カ節^カ
傳^カの^カ一^カ一^カ撰^カ板^カ化^カて^カ核^カ心^カ合^カして^カ事^カなり^カ一^カ
撰^カは^カ其^カ款^カの^カ撰^カ一^カあ^カる^カは^カ近^カ属^カの^カ内^カ在^カなり^カ盗^カ
の^カ撰^カなり^カ横^カり^カて^カ人^カの^カ撰^カ一^カ暴^カなる^カは^カ撰^カ事^カ
業^カの^カ撰^カの^カ取^カ内^カ書^カの^カ骨^カなり^カ外^カ剛^カ堅^カと^カ撰^カ揚^カ
も^カ是^カを^カ強^カて^カ横^カり^カて^カ事^カ也^カ撰^カと^カ撰^カて^カ撰^カる^カ
ひ^カ抄^カと^カ事^カ也^カと^カあ^カる^カれ^カり^カ
○其^カ人の^カ白^カ鳥^カ款^カ系^カ本^カ合^カ名^カの^カ撰^カは^カ撰^カ性^カ撰^カ是^カ
事^カ百^カ家^カの^カ書^カ編^カの^カ難^カ見^カなり^カの^カ撰^カ多^カく^カ撰^カ人^カ我^カ
と^カ撰^カを^カ撰^カり^カも^カあり^カ一^カ也^カを^カ撰^カの^カか^カり^カ也^カ撰^カ日^カ
怪^カと^カ見^カて^カ撰^カと^カ撰^カれ^カは^カ撰^カなり^カ撰^カ性^カは^カ撰^カ不^カ撰^カの^カ撰^カ

牛馬問二 十四

徳よりその一務として不能むく漢の董仲舒の家
人來て曰天而降人として仲舒言て曰巢と作て
極の以能風の吹ん事と知穴と穿て居るとの
能面の来り事を知今汝而此降人の子と云ふ必
狐狸死又吾老るる氣なりと一彼の即古狸と
發して去ぬ又殷の胡庭と葉と根と自然と生
一首よりして大工去新と古老の作せて古を新と
二本とも海中不植て空と云ふ事本工あつた野分田
余の本るれ胡庭亡して荒布となりん前素と中
王大工忘れ政道を治りて流るる國業の爲高更
の悉より一財胡海工崔巢と作ら子なせとを

大なり事鶴乃卵のよう流て相人として考ふ世
あつた小なり事の人と化を元香也と雲を高王
蓋無は極め終工を國家と失ふ事ん災祥は
その心よりして人を福と信する
○天發妖異は君徳の缺なり故に小人のあつた
政事は陶九成が曰至正辛卯年日本千八代崇光帝の
親應元年とあり
松江の宗の普照寺といふ寺乃僧告ふて弊あり
帚と花と穿く又嘉興といふ所の陶氏の嘉慶あり
本より善條と幾く白紙紙用く又呉江といふ
所の殿工の嘉柳樹の椿と鉄磁とおくもの十餘年を
るよ長條敷蓋をとりて葦のようし一草の奇怪

るるといふ太三家にも何の恙もなかり是國家の
氣數に係りのこと

○老木乃精狀魚物のことありて尾なり意なく
念ふ一は是を彭侯と名はく又老木強伐也
西と汗出を色極て赤

○凡右把陰氣小お感す此の妖怪とあり人々を悩
れは是陰邪なるに氣力うを起人の手邪小務事不
能加ふる心切手法なり一が森田何某が把陰
を改め世より江戸深川に千三問堂のを名ふ久し
明家のよりと申醫者た後て梅やふ部と形病
氣付ふれは是六定て久安明家ときめぬれ陰陽の

此記すこと此業と此も證の極は是矣
あつた時、追脅ううと驚くとしておぼえを
い醫然不慮おひあつた一我おれりか始と
なり難具邪陰の方より冷風吹來るを感す此也
西氣と形力たまさか一妖怪の爲るもたまさか
と定てつち何れあや一さそのもる能く見て美
と申付る所子とせらるる怪しむべきおらるる
右記持佛堂のより開て見れども一おれらるる
といふ所の戸を開て見れども一おれらるる
病入る守るれは是より後百年も経ちたおと見
つちけその妖とありて疑ひなり一打割て薪と積

てその中へ投じて焼くを鼻風流姑と云ふは
病癒ふ愈

○妖怖をわく尿を奇病といふものも醫家の
書に多く見ゆる所唐の活州の人應病とあり
喉の中より声あてて自り云葉一應とある乃
病なりをさるる名醫法文件を繕て志すは
と云ふは文件の白のりなる病はさうして
て波事なく醫師に於ては事なり思葉と下
と云ふは病の類と云ふ事ありてこれ云々なるは
別な葉姓持てて彼病人なりと懐くはさうと
あてはるるを應へて懐く懐て貝母の陰下と云ふは病

つゝゝ應の事と云ふは文件のまゝ貝母と云ふ
葉一病終に治す

○御那代解海と張密といふ人性賢孝ありて母
病り齋戒して股を割て是れをむむ病は愈
有り又雷天錫といふ人の年七歳の時父の病急
なり役を割て縋のりて切て父にすむ飲て咽
るなりと別獲のり又天竺ふても忍辱を子乃父母病
重犯時醫者乃云腹なき人乃肉を茹とすく
を子なりやう國中の人不腹のりなるを其れ親
乃茹とかりくはれは我生れてもわ不腹ゆへに
忍辱と云ふく月茹とあるんと肉を割わく

活しりと大報恩經よりありけ敷い願恩乃傳
作しと篤信して習て以ては實とてて對する馬
と不食牛牛乳不食人人肉食を可るんん志の
類も志乃厚徳なりといふの今世俗の富貴乃
人下肉を殺ても事といふ事なり
○伯利西爾は人倫乃作法よりは野野所
て人を殺し候り候りといふ事をも代りて徳は乃
人徳来り交易より事多くあり人倫の作法
は知りて人を食ふ事なりといふ事なりは夷
狄の中乃夷狄よりて人道よりいふ人類より
て發せりといふ

○聖人曰く時と君臣の義より今を實成りんん
人のいふ事なりといふ事なりは君臣の徳より
事なりは君臣の徳より
かよりて東武源川に中葉寺といふ寺をいふ
方丈徳指して事徳と寺徳といふ徳の塵宇と好
かりしなりは道徳に中より徳なりといふ事なり
小てとせの友源成水色に志せりて善徳と徳より
の比池上乃樹間より大なり徳のいふ事なり
かげ徳より徳より浮世と徳よりいふ事なり
飛ぶるあやまひて徳の徳よりいふ事なり
て徳よりいふ事なり

牛馬同二

開^{タカ}く^{ツイニ}し^{アキ}て^ニ又^ハ悔^ヒは^ルけ^テ去^リぬ^ル蜘蛛^ノに^ノ破^レつ^テ去^ル
 家^ヲと^テ殺^スて^テ自^ラを^テ池^ノ中^ニに^テも^シ荷^ヲ懸^クて^テ死^シて^ス宿^ヲ懸^ク
 誠^ニ公^ノ事^ヲ成^スる^ノの^ノよ^シと^シて^テ死^シた^ルに^テも^モう^シら^ズの^ノ
 荷^ヲ懸^クて^テ死^シて^スる^ノを^カら^ズに^テも^モう^シら^ズの^ノ
 と^シて^スる^ノは^モう^シら^ズの^ノ人^ニて^スる^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 數^ノ方^ノの^諸君^ニも^テ來^リて^ス事^ノ露^ヲの^所に^テも^シら^ズの^ノ事^ヲ
 後^ヲを^テ入^レて^テ際^ノ子^ヲを^テ入^レて^スる^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 と^テ悔^ヒは^ルけ^テ去^リぬ^ルに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 なく^テ其^ノ後^ニも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 此^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 する^ノ人^ハと^テ世^ノ部^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ

鷹^ノと^テよ^クあ^リま^シる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 と^テ穿^テて^スる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 是^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 ま^シて^スる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 の^ノ君^王あ^リま^シる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 人^トして^スる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 彼^ノ和^高の^名と^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 の^ノ法^ナり^ます
 ○事^ノ類^ニも^テ宇^ノ松^ノ國^ノと^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 と^テあ^リま^シる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ
 即^チして^スる^ノに^テも^モう^シら^ズの^ノ事^ヲな^シて^スる^ノを^問ふ

牛馬周二

一 指し方し縁の上へ血走りてり落し息依し征
めん方なり大なり蛇落て死す方なりし血を露ツヒラカ
すりふ露ツヒ来ててししは露し集を伝りてしとてし
蛇のしめし卵タマゴとてし生セイ育イクなり事なりしは
去身乃滅と第し貯タケ今し終に敵試たりぬ
物行の所くし理る是予親しく言ふなり

牛馬同養くし二終

